過去の災害に学んで

東松島市立矢本西小学校　六年　菅原　慶人

私の住む東松島市には「滝山」という山があり、私の家は滝山から四十メートルほどの位置にあります。これまでは、土砂災害のことはあまりまぜんでしたが、全国で起こる様々な土砂災害のニュースを見ていると「滝山は崩れたりしないかな」と、少し不安を感じるようになりました。

インターネットで情報を集めようとしていると、祖父が色々と教えてくれました。なんと祖父が高校生まで住んでいた家は、今より もっと山際にあったそうで、土砂災害が原因で山から離れて現在の位置に建て直したといいます。こんなにも身近に土砂災害が起こっていたとは気付かず、とても驚きました。

土砂災害が起こったのは、昭和四十一年九月二十五日の早朝。前日からものすごい雨量だったそうで、祖父の妹が山側の部屋で寝ていると、早朝に「ドーン」と大きな音がして、

一気に土砂が流れこんできたそうです。部屋の中で妹は首まで土砂に埋まってしまいましたが、間一髪で一命を取り留めました。家は住める状態でなく、それをきっかけに山腹から道路側へ家も崩れたことのことです。崩れた山の一部は曾祖父の土地だったそうですが、三年ほど前から近隣の住宅の建材として「かやの木」を提供していたため、伐採後は斜面が不安定になってしまったと曾祖父が祖父に話してくれたことのようでした。

「土砂災害」が一気に身近に感じられるようになり、私の不安は大きくなりました。

翌日、祖父にさらに詳しく聞くと、曾祖父から引継ぎ祖父のものとなった山は、現在、土建会社が土を削って管理をしているそうです。土建会社から渡された地質についての資料を見せてもらうと、私の暮らす地域は「分厚い岩盤」の上に「砂が混ざった柔らかい土」が

ある状態だと分かりました。山を削っているのは、台風等の大雨の際に、かつてのような土砂崩れを起こさないためたそうです。実際に山の様子を見に行くと、確かに斜面の土は柔らかく、砂と土が混じり合い、大雨が降るとすぐに流れてしまうようなものでした。斜面の様子を見て、大雨が予想される際には、家に残ることなく、速やかに避難所へ避難をしようと家族と話し合いました。

祖父から色々と教えてもらう中で、私は普段から身の周りの自然環境に関心をもつことが大切だと感じるようになりました。また、祖父のように古くからその土地に暮らす人たちと関わることは、過去に起こった災害や地域の特色についての理解を深め、起こりうる災害に備えるために大切な役割をもっていることにも気付きました。「防災」で大切なことは、受け身にならず「自ら情報を集める姿勢」だと思います。大切な命を守るために、これからも私は学び続けていきたいです。